

今回から「わかる／わかる」について見ていきたい。他動詞「わかる」に格助詞「を」が伴った例をみると、「からとにほんを」(二号 34、四号 33、57、58)、「このみちを」(四号 59)、「善とあくとを」(五号 6、十三号 40)、「上たるの火と水とを」(六号 5)、「これを」(十号 58)とある。「を」を伴ってはいないが「わかる」の対象として解されるのは、「心」(二号 36、四号 104、十一号 4、6、7)、「にほんのもの」とふぢんと」(二号 46、47)、「むねのうち」(四号 107)、「この火水」(六号 6)が挙げられる。他方で、自動詞「わかる」に格助詞「が」がついた例をみると、「よろづが」(三号 80)、「をふくのむねが」(四号 87)、「むねが」(七号 44、75、十号 90)、「しんか」(十二号 131)とある。また、「が」に関していえば、「わかる」を「わかり」(連用形名詞)として用いて、「わかり」「が」「ない／つく」と表現されている。

ところで、「わかる／わかる」には、こうした格助詞「を」や「が」を基準にしては読み取れない意味の多重性があると思われる。というのも、「わかる」は本来自動詞なので目的語を取らないが、例えば「相手の気持ちを分かろうとする」や「私のことを分かっしてほしい」というように、「理解する」や「判別する」、あるいは「受け入れる」という意味合いを含む場合には目的語を取る用法もあり、「わかる」においては格助詞「を」の配置と自他の区別が必ずしも明瞭ではないからである。そこで、そうした格助詞を手がかりとしつつも、あまりそれにはとらわれずに、それぞれの文脈に即してみていくほうが適切であろう。

まずは、二号に次のような歌がある(下線は筆者)。

これからハからとにほんのはなしする
なにをゆうともハかりあるまい (二号 31)
とふぢんがにほんのぢいゝ入こんで
まゝにするのが神のりいふく (二号 32)
たんへとにほんたすけるもよふだて
とふじん神のまゝにするなり (二号 33)
このさきハからとにほんをハけるてな
これハかりたらせかいをさまる (二号 34)
いまゝでハ上たる心ハからいで
せかいなみやとをもていたなり (二号 35)
これからハ神がたいない入こんで
心すみやかわけてみせるで (二号 36)

31で、「からとにほん」というテーマについて「わかり」がないだろうと述べてから、34で「からとにほん」を「わかる」とした上で、下の句で「これ、が「わかりた」なら世界が治まると歌っている。自動詞・他動詞という視点から見れば、31で、人々の心に自動詞的な「わかる」がないので、34で神が積極的に他動詞的な「わかる」を示し、さらに下の句で自動詞的な「わかる」が生じることを念願している。同じように、続く35で「上たる心」が「わからない」ので、36で神が「分けてみせる」と歌われており、「上たる心」において自動詞的な働きとしての「わかる」がなかなか生じてこないの、神がその心を対象として、他動詞的な「わかる」という働きを行使することを明示している。こうして、人の心がそれ自体として働く側面と、他方でそれだけでは働かないことから神が積極的に働きかける側面が、「わかる／わかる」という対語で示されているといえよう。

ところで、34の「これ」には含蓄があり、34の「わかりた」は「からとにほん」が「わかる」ということと、その話それ自体が「わかる」という二重のレベルで捉えられ得る。つまり、

いま現に実践しているこの「おふでさき」の読解を通して神意を「わかる」ということは、ある意味で親神の「わかる」という働きに導かれているともいえよう。

二号には、さらに次のような歌もある。

高山のにほんのものにとふぢんと
わかるもよふもこれもはしらや (二号 46)
とふじんとにほんのものとはけるのハ
火と水とをいれてハけるで (二号 47)

ここでも「からとにほん」というテーマで、「高山」における「にほんのもの」と「とふぢん」(「から」のもの)とを親神が他動詞的に「わかる」というのは、「はしら」(甘露台)に関連したことであり、その働きはまた「火と水とを入れて分ける」と表現されている。このことは六号でも次のように述べられている。

上たるの火と水とをわけたなら
ひとりをさまるよふぎづくめに (六号 5)
この火水わけるとゆうハこのところ
よふぎづとめをするとをもるよ (六号 6)

「高山」と「上たる」はほぼ同義であるが、ここでは「火と水とをわかる」ということが、「よふぎづとめ」をすることと関連づけられており、他動詞的に「わけた」結果はやはり自動詞的に「ひとりをさまる」と表現されて、その治まった状況は「よふぎづくめ」と示されている。

四号でも次のように、「からとにほん」を「わかる」ことについて歌われている。

このさきハからとにほんをすみやかに
だんへハけるもよふばかりを (四号 33)
これさいかはやくわかりた事ならば
神のざんねんはれる事なり (四号 34)

ここでは、33「わかる」と他動詞的に述べ、34で「わかりた」と自動詞的に述べている。また、四号の別の箇所では、次のように歌われている。

だんへとよろづたすけをみなをしへ
からとにほんをわかるばかりや (四号 57)
にちへにからとにほんをわかるみち
神のせきこみこれが一ぢよ (四号 58)
このみちをはやくわけたる事ならば
あとのよろづハ神のまゝなり (四号 59)

「からとにほん」を「わかる」「みち」が「よろづたすけ」に関わることも示されている。

これまでにとふりてきたるみちすぢハ
からもにほんもわかりないので (五号 83)

五号では、これまでに示されてきたことの裏返しとして、「からとにほん」に「わかり」(自動詞)がないと歌われている。「からとにほん」が具体的に何を示しているのかは十分解しきれないが、しかし、親神が両者を「わかる」ことを望まれ、その働きは「はしら」(甘露台)に関連し、また、「火と水とを入れて分ける」とも表現され、それが「よろづたすけ」に通じるような「よふぎづとめ」をすることであり、結果として「よふぎづくめ」になるということは明らかである。そして、そうした親神の望みや働きを「わかる」ことそれ自体が、両者を「わかる」ことと相関していることが読み取れる。すなわち、親神の「わかる」働きに導かれながら、「おふでさき」を通して神意を「わかる」ことが、みずからの「からとにほん」を「わかる」こととなるのであろう。